

審査の結果の要旨

氏名 杉木恒彦

杉木恒彦氏の「母タントラの宗教性——真理観と初期中世社会」は、12世紀頃に成立したインド後期密教の『八十四成就者伝』のテキスト（チベット語）を丁寧に読み解き、日本語訳を作成し、そこに見られる真理観と、想定されている実践倫理や修行生活の諸形態を解明し、この資料を生んだ「民衆密教」運動の宗教社会学的意義に説き及んだもので、諸学問分野をまたぎつつ首尾一貫した立論を行おうとしている。

『八十四成就者伝』は9世紀から12世紀の密教行者の生涯や修行生活を語っているが、氏はそこで前提とされている真理観が、母タントラの代表的經典、『ヘーヴァジュラタントラ』や『ヘールカアビダーナタントラ』と同じ構造をもち、「空にして一なる真実在」である「心性」が世俗外的でありながら、世俗内に遍在すると見なすものであるとする。この真実在へと到達する方途は性ヨーガが原型で、形式化した僧院仏教に対抗し、あえて不浄とされる行為に解脱への道を認める「無分別」の教えが鮮明に表現されているとする。

民衆語で記されたこのテキストがたたえるのは、異形の風貌で遍歴し、民衆の中で民衆とともに解脱（成就）を追求する脱俗の行者である。とはいえ、真理に随順するあらゆる行の平等性を認める考え方にのっとり、在俗の行者やさらには僧院の比丘に対してさえ、成就の可能性を認めていることも示される。範型としての脱俗行者と、容認される型としての在俗行者、比丘行者のあり方が鮮明に対比されつつ分析されていく。

その上で杉木氏は、このような脱俗行者を中心とした民衆密教の展開は、莊園領主化した聖職者層を批判し、興隆する農民らの下層民に救済の道を開こうとするもので、ヒンドゥー教のバクティズム運動と類似し、インドにおける古代的宗教から中世的宗教への転換を画するものであったと位置づける。社会構造の変容を背景に、後期密教の展開史に大きな見取り図を示そうとした野心作であり、一部に性急な論の運びも見られないわけではないが、おおかたは資料に即しつつ力強い推論が行われている。

よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。